

# 内航貨物船 船長の講演 2回目が実現

拓殖大で「イマドキ」の内航海運 PR

全日本内航船員の会 事務局

現役の船長による内航海運を PR する講演会が 4 月 21 日、拓殖大学の文京キャンパス（都内）で開催されました。講師を務めたのは Twitter でも広く人気のある「大吟醸船長」。日本の周辺を北から南へと航海を続ける内航不定期貨物船「大峰山丸」（499 総トン）の常定信悟船長です。

2017 年にも内航海運を PR する講演の要望がネット上で膨らみ、東海大学（静岡県）の学生と大学の協力によって講演会が実現しています（\*内航海運新聞 2017 年 1 月 30 日号）。当時は、東海大学海洋学部の学生と一般の聴講希望者も加わり「内航船員生活の楽しみ方、踏ん張りどころ、内航船の人手不足」というタイトルで講演されました。

あれから 2 回目。今回も海陸を超えた SNS での交流の中で、拓殖大学の松田拓磨教授（商学部）から要請をいただくこととなり、交通論の授業への登壇が決まりました。当日、都内は新型コロナの感染拡大が心配される状況下であり、一般の方の参加はできませんでしたが、広大な C101 教室で感染対策のもと 100 人以上の商学部の学生を対象に内航海運の世界が紹介されました。

当会で作成した「第2回 大吟醸船長内航海運 PR 講演 at 拓殖大学」の告知バナー

大吟醸船長（内航船）講演！

『陸と船を隔てる海ではなく つなげる海でありたい』

4.21

第2回目は拓殖大学だ。

貨物船大峰山丸

## 「船は人、人は船」

講演が始まると、島国の日本で内航船が果たしている重大な社会的役割をデータで紹介し、次には前回同様、厳しい仕事も遊び心を持って「自身で解決していく工夫」が大切であるということや、そういった取り組みが船全体を変えていくことを「人生」に重ね、「人の生きる手本を目に見えるかたちで実践していく船乗りの仕事」が魅力的であることが紹介されました。そして、今ここに来てくれている学生の誰でもが船員の養成学校に行けば内航船員になれることを説明し「内航船員は決して一部の特別な人がやる仕事ではない」という事実を印象付けました。その上で船長は、交通論の学生たちに対し「皆さんは今後たくさんのデータに出会い、様々なことを学んでいくと思う。船に限った話ではないが、そこに出てこない世界や人たちがその数字を支えていることを感じてほしい。そうすることで数字の持つ本当の意味が分かり、より深い見識を持つことができるようになる」と語りかけました。



ちょうど今、物流問題を改善、発展させていくための議論に「物流現場と荷主との相互理解が不可欠」という流れが起こっています。さらには、市民社会に対して物流へのコスト意識や理解、応援を求めていく始まりにもあると言えます。

講演では、陸の一般の方の提案から記念日登録が実現した「内航船の日」（＝7月15日）についても触れ、終盤は「陸と船を隔てる海ではなく、つなげる海でありたい」と船乗りの熱意が投げかけられました。

物流の未来が、こういった産業の垣根を越えて共有できる価値観と、市民社会からの親近感の中で発展していけることを考えさせられる講演となりました。（了

\*拓殖大学の関係者、松田教授、学生の皆さん、大変貴重な機会を一緒に作っていただき、ありがとうございました。  
(事務局 松見 準)

今回の大吟醸船長講演会には多くメディアの取材がありました。ありがとうございます。海事プレス(4月22日付)、Daily Cargo(4月22日付)、 SHIPPING ニュース(4月22日付)、日本海事新聞(4月23日付)、内航海運新聞(5月3日付)